

助成年度：平成19年度

[所属] 信州大学 農学部

[役職] 助教

[氏名] 内川 義行

[課題]

## 名勝・姨捨棚田におけるため池水利用と文化的環境保全の持続条件

[内容]

姨捨棚田は長野県千曲市の西南端に位置し、その景観は「田毎の月」の名所としては古くは平安期より知られ評価されてきた。棚田は「大池」と総称される3つ（上中下）のため池群（合計貯水量26万 $\text{m}^3$ ）を水源とした用水を利用して耕作される。大池には弁財天清水と呼ばれる湧水から引水・貯留している。さらに、大池は「市民の森」（市有林）に取り囲まれ、これが水源涵養の森を形成する。棚田用水は、ため池築造以来現在にいたるまで、地元農家による水利団体（用水組合とその上部組織としての土地改良区）が、水源周辺の森―湧水―ため池―用水路―棚田を一貫して厳格に管理している。この利用と管理の結果、棚田の耕作が維持され、その景観が人々に供されてきたといえる。

本研究ではまず、①既に名勝として保全される姨捨棚田の背後にある環境をも含め、その文化的環境の構造について歴史的経緯と現況をふまえ明らかにした。

次に②水源（ため池）からの用水系統について明らかにした。従来、模式的な水利系統図はあったが、一筆単位（約1800区画）の確認は相応の時間・労力を要し、地元関係者ですら十分な把握はできていなかった。このため完成データは関係者へも多くの感謝をもって活用されている。

さらに③各水利系統を管理する用水組合の現状を聞き取り等により明らかにし、「棚田保全」要望とその支援の状況を踏まえつつ、今後の課題を抽出した。

また④ため池水利用をささえる〈水系連続性〉のもと、結果として存在する〈巨大ビオトープ〉としての生態系の一端を植生構造からみることを試みた。

最後に⑤姨捨棚田保全の前提である〈水系連続性〉を支える水利用の今後のあり方として、大学等の教育研究機関（第三者の仲介）による、あらたな仕組みづくりの提案を、「文化的環境保全」の持続条件として示した。